



Members of Kirihara participate in TESOL 2017

今回は、英語教育の国際的な会議に参加するためアメリカを訪れた弊社社員の報告をお届けします。

私にとっての初めてのアメリカは、カナダとの国境に近い西海岸の街シアトルとなりました。

シアトルと言えば、大リーグのシアトル・マリナーズや、ジミ・ヘンドリックス、ニルヴァーナなどの有名ミュージシャン誕生の街として知られています。他にも、アマゾン・ドット・コムやボーイング、近郊にはマイクロソフトもあります。やはり一番はスターバックスコーヒーの発祥の地であることでしょうか。街中を歩くといたるところにスターバックスを目にします。日本で飲んだカフェラテよりも美味しく感じたのは、コーヒー豆のせいなのか、それとも元祖の地の雰囲気のおかげなのか…。

私の訪問した3月下旬はまだ雨が多い時期でしたが、街を歩く人たちはほとんど傘をさしません。アウトウェアのフードをかぶり、何事もないかのように歩いています。



さて、なぜシアトルを訪れたか。

それは、TESOL2017(*)に参加するためでした。移民の多いアメリカでは、non-native に対する英語教育について他国と同じような問題、悩みを抱えているようで、日本の英語教育に参考になる内容も多いと感じました。

発表やワークショップの中でも日本で馴染みのあるキーワードがたくさん聞かれました。

empower, engage, encourage, motivate, scaffold, flipped learning, blended learning, online, YouTube, Facebook, grammar, skills, interactive...

学習者が英語を使うことを後押しする教材をより追求しなければならない、と決意を新たにして帰国しました。来年は、シカゴです！



※TESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages) 2017

英語教育に関する世界最大の国際会議であり、毎年50以上の国々から1,000人以上の登壇者を招き研究発表が行われるイベントで、参加者は7,000人を超える。





英文校閲者のひとりごと⑤

桐原書店の英文校閲担当者（アメリカ出身、在日歴長め）が日本で感じたちょっとしたことをつぶやきます。

Japanglish



When I first came to Japan in 1992, I had to build up two new vocabularies: Japanese words and “Japanglish” words. Japanese people were surprised that certain “English-sounding” words they used weren’t “actual English.” Examples include “naiibu” (from the English “naive”) and “kure--mu” (from “claim”), which can be translated as “sensitive” and “complaint” respectively. There was some confusion at first, and I probably felt a little insulted when someone said, “Karl is a little naiibu.”

One drawback of living in Japan for a long time is that Former Native Speakers (FNS) like myself tend to accept Japanglish into our own natural vocabulary. I was a little surprised to learn upon a visit back to the U.S. that they didn’t understand “I’d like to order an L-size pizza.” (Natives call it a “Large” .) I remember another FNS in Tokyo say to me years ago, “So you’re in a pinch?” (Translation: “So, you’re really busy now?”) And then there is the highly unnatural “See you again” (“See you later”), which I am guilty of using from time to time, perhaps sarcastically.

The sad fact is that I understand FNS Americans better than any other group of people in the world now, including the people I grew up with back in the U.S. So maybe I should call myself Urashima Karl.



自身で描いた勤務先周辺の風景

日本語訳

ジャパングリッシュ

私が 1992 年に初めて日本にやって来たとき、新たに 2 種類の言葉を覚えていかなければなりません。すなわち、日本語と「ジャパングリッシュ（和製英語）」です。日本人は、自分たちがよく使っている「英語らしく聞こえる」言葉のいくつかは、実際の英語の意味とはかけ離れていると知ると驚きます。例えば、「クレーム（claim）」と「ナイーブ（naive）」は、それぞれ「苦情」と「繊細な」という意味で使われていたりします。私がこうした言葉を聞いたとき、最初はとまどいを感じました。claim は「正当な要求」のことです。また、「カー口、あなたは少しばかりナイーブね」などと言われたときは、ちょっと侮辱されたような気がした覚えがあります。naive には「考えが甘い、だまされやすい」という意味があるからです。

日本で長く暮らしていることの難点の 1 つは、私のような「元ネイティブスピーカー」は自分の母語に和製英語を混ぜて使ってしまうがちなことです。アメリカに一時帰国したときに、ピザ店で I’d like to order an L-size pizza. (L サイズのピザを注文したいです) と言って店員に理解してもらえなかったときは、ちょっと驚きました。ネイティブは L-size ではなく large の語を用います。また何年前に、東京に住む別の「元ネイティブスピーカー」から、So you’re in a pinch (じゃあ、あなたは今、ピンチなんですね) と言われたことがあります。当人は、「今、あなたはすごく忙しいんですね」と言ったつもりなのです。さらに日本人は、外国人の友人との別れ際に See you later. (じゃあまたね) ではなく、まったく場違いなことに See you again. (いつかまた会いましょう) と言ったりしますが、私はこの表現を嫌味のつもりでないかぎり、めったに使いません。

悲しいことに、今の私は、アメリカで一緒に育った人たちを含めて世界中のどのグループよりも、「元ネイティブスピーカー」のアメリカ人たちが話すことをずっとよく理解できるのです。私はそんな自分のことを「浦島カー口」と呼んだほうがいいのかもしれませんが。

